

公舎に住む人々も同じこと、その度に主人等の自警団はお世話し、茶毘にする。私達は花一本供えてくるばかりでした。その哀れさ、戦争が終ったのに、平和になった筈なのに、この惨状、敗けても日本の国はあるのに、こんなソ連と八路軍の仕打ちに会わねばならんとは、憤怒やる方なかつた。

こんな生活の中に、かつて農事試験所にいた頃の王という満人が卵と米をもつてきて、県公署できいて、やっと見つけてきた。日本に帰るのか、と心から別れを惜しんでくれたのが忘れられません。

昭和二十一年七月二日、引揚者は撫順小学校の運動場に集合し、名前と所持品の点検が始まった、ところが検査する兵士の中に、公舎にきて押入れを封印した兵士が、私を覚えて笑顔で、帰るか、帰るのかと言って荷物を背負えと手伝って呉れました。平和であれば人間は皆同じだと思えました。緊張の気持がやわらいだ一瞬を覚えています。

奉天、錦州、コロ島に着き、大夕立ちにあい、皆ずぶぬれ、長男の手を引き、肩の紐を握りしめ、前を行

く人の足元を見て歩いた、長男も次男も、この親の心を感じたのか一声の愚痴も泣き声も出さず、びしょぬれになって乗船したのだった。

日本に帰れる、と思うと無性に涙が流れた感情でした。その当時夫三十六歳、妻の私は二十九歳、長男四歳、次男一歳であつた。

## 敗戦とわが子の死

熊本県 坂本 喜代子

三女の瑞代は腸の病気で、ハルピン赤十字に入院していたが、八月八日、二歳半の短い命を閉じてしまつた。

ソ連軍が、日ソ不可侵条約を破って、侵入してきた日である。

身辺にひしひしと不穏なものを感じながら慌しく茶毘に付し、当時佛壇とてないので、テーブルに骨箱を安置していたのだった。

八月二十日頃であつたらうか、暴民の群れはついにわが公舎にも襲つてきました。主人は日本人会に行つて留守、五歳の長女の手を引き、二女をボーイにおんぶさせて、暴民の怒号を背にききながら、やつとの思いでわが家を脱出しました。

翌日、荒れたわが家に帰つてみると、家財の一切は盗られて靴、履物まで持ち去られ、子供の骨箱まで持つていつてしまったのだつた。何という可哀想なこと、早死にさせた悔悟の念に加えて、二重の悲しい重荷を背負つたのだつた。

敗戦後一年余の間、限りなき苦しみにあつたものの、主人が培つた五族協和の成果の余徳か、或は主人の満人との心の融け合いがあつたからか、ソ連軍にマークされ、幾度も危機に立たされながら、その度に満人から情報を提供してくれたり、かくまつたりしてくれた。また、満人の友人宅などに預けてあつた衣類等も全部かえしてくれたので、着物の売り捌きも有利に展開してくれました、その点、私共は恵まれていたと思えます。

後日談になりますが、引き揚げ後も、こうした満人と交流が続いております。

九月、中秋の明月の夜、主人と戸外に出て冬の間近さを思わせる夜気の中で、美しい月の光を浴びながら、とりとめのない話に、今を忘れたのだつた。満州国内の抑留生活唯一の緊張から放された思い出でありました。

ソ連兵が侵入してからと言うもの、前ぶれもなく二人でやって来ては時計をねだつた。兎に角時計は貴重品であり、ほしくてたまらないもの一つであつた。そうしているうちに娘さんがソ連兵に凌辱された、凌辱された娘さんは青酸カリで死んだ。

そんな或る日、主人はピストルを持参してきました。そして私に自衛のためにもつてきたと言つて、ピストルの扱い方を教えるのだつた。相手を撃つということよりも、自決のためのものだつた、そういう切羽詰まつた話も、あの状況下では淡々ときかれたのだつた。いざとなつたらピストルの銃口を自分の胸にあてて引金を引けばいいのだと決意したのであります。

その後、帰国の情報が流れては消え、流れては消え、わずかばかりの持ち金で何時まで支えられるものやら、冬をもう一度ここで過さねばならなくなった場合、生活していけるのだろうか、と不安な材料ばかり満ちていました。

しかし、やっと噂が現実のものとなった時、私は別の心配があった。四人目にして生れた長男の一（はじめ）は、その頃肺炎にかかり動かせない状態だった。しかし、この機会をのがしては日本に帰れなくなってしまう、何としても皆と一緒に帰らねば、郷里に帰らさえずれば、父は医者であり、薬の手だてもあるのでは、と思うのが精一杯の気持の救いだった。長いコロ島までの道のり、何とか小康を保って錦州まで来た時だった。

難民収容所で同郷の市川半蔵さんに偶然出会った。お互いの無事を喜び、そして半蔵さんは一足早い便で帰国したのだったが、「帰国したら直ぐ、坂本徹さん一家の無事を、実家に伝えます」と言ってくれた。

二十一年十月十六日、やっと私共も乗船の運びとな

った。最後の段階にこぎつけた。と安堵したが、船の食事は極端に悪く、うすい高粱粥だった。その上量も少なく、母乳の量まで少なくなっていた。長男の一は目にみえて弱っていた。船医さんが診てくれても薬はないし、栄養物もないし、それでもあと何日かまで博多に着く日を待ちあぐねた。

コロ島への行進中に幼い児が次々と死んでゆくのをみてきた。駅舎の裏に埋葬した人が多かった。それが間もなく満人から死んだ子供の着物をはがされてしまふのだった。

船に乗る時は一歳未満の児は私の長男、一以外にはもういかなかった。その一も祈りだけでは命は続かず、十八日、遂にあの世へと旅立ってしまった。

手当も受けられず、内地を、そこに見ながら命絶えたこの児の哀れさ、親として悲しみは計り知れないものだった。

翌、十九日、船の死者は水葬に付さねばならない、最後を見届けてやるべきだと思いましたが、どうしても鯨の餌食にされる水葬の儀式に立ち会い得るもので

はない。主人に頼んで、私と娘二人は船室に残った。悲しいドラの音を響かせて、船はその場を一周してくれました。

誰も彼も、みんな悲しく辛い引揚げ行だったに違いないが、その前後に、二人の子供をなくし、亡骸も、遺骨も内地に連れ帰ることすら出来なかつた私達は不幸のどん底であつた。

市川半蔵さんの報告で、心待ちしていた両親もガツクリ肩をおとすのだった。

## 労苦の体験

熊本県 吉村 貞女

昭和二十年八月九日、ハルピンの空に飛行機が現れた。アメリカの飛行機と思つたら、ソ連機である。あちら、こちらと爆撃した。それは全く皆意外であり、口惜しい無限の感情がこみあげていました。

やがて、ソ連兵がわが家に無断で土足のまま侵入し、

物盗りにきた。時計、衣類を持って去つた。抵抗もできず、残念でたまらない。

戦争で敗ければ、盗られても殺されても仕方もないものかと憤怒やり方なかつた。

夫が満州国医科大学の庶務課に勤務していたので、同僚の鮑さんに貴重品をトランク六個に入れて預かつてもらいました。平和になつたら届けていただく約束だったが、引揚げ直前まで音沙汰はない。

収入は無し、衣類その他を売り払いました。

吉村家の紋のあるのは先祖に申し訳ないから売らないと言つたら、主人はじゃがいもも買えなくなつたらどうする、と言われ、五十円、百円と売り払つてしまつた。

そうした中で、二十年十二月十日、姑を亡くし、二十一年三月四日に夫を亡くしてしまつた。敗戦の食うや食わずのどん底の混乱生活の中で不幸に次ぐ不幸は言葉も文字でも表現できない苦勞を通り越した悲痛きわまりないことであつた。読経は済ませたが、火葬場までは危険だと言って、心ならずも遺髪だけ抱いて